

海域の概要

本湾は、女川湾の南東にある湾です。湾内は変化に富んだ地形で、寄磯崎付近の岩礁地帯から湾奥の砂浜まで様々な景色がみられます。



Specification

諸元

湾口幅：2 km

面積：8.6 km²

湾内最大水深：3.4 m

湾口最大水深：3.4 m

閉鎖度指標：1.47

備考：環境基準類型指定水域

Location

範囲または位置

宮城県牡鹿郡牡鹿町高山三角点(北緯 38度 21分 19秒 東経 141度 30分 31秒)から 40度に引いた線及び陸岸により囲まれた海域。



環境

湾口を太平洋に開いている湾で、沖合を津軽暖流が流れ、気候は太平洋気候帯に属しており、東北地方の中では冬も温暖で積雪量も極めて少ない地域です。

湾内には、流入河川も少なく、沿岸に大きな都市も発達していないため、全般に水質は良好になっています。

自然

三陸沿岸の南端の牡鹿半島の基部に位置するリアス海岸で、寄磯、鮫ノ浦、祝浜等の海岸美を持ち、南三陸金華山国定公園に指定されています。

湾内には、北岸・南岸の岩礁域のアラメ場、ワカメ場、ガラモ場や湾奥部のアマモ場等の藻場が分布します。

文化歴史

牡鹿町は、永い間、「捕鯨のまち」でした。日本沿岸では、昔からセミクジラの回遊があり、鮫ノ浦湾等に迷い込んだ「寄りクジラ」やシャチなどを捕えていました。

牡鹿町・金華山沖での捕鯨のルーツは、江戸時代に仙台藩（伊達藩）の命によって、鯨組と呼ばれる捕鯨専門の組織が作られたことによるとされています。昭和初期には、

国内の大手捕鯨会社9社が集まって牡鹿の捕鯨基地の歴史は最盛期を迎えていました。

しかし、捕鯨を取り巻く国際的な圧力が年々増し、昭和62年（1987年）を最後に、一部の鯨種を除いて捕鯨が全面禁止となりました。牡鹿町では、多くの捕鯨従事者が職を失って町を離れて行き、14,000人近かった人口が、現在では約6,000人となり、半数以下に減ってしまいました。



捕鯨絵図

産業

商業捕鯨禁止以降、牡鹿漁業の再構築が始まりました。それは、これまで華々しい捕鯨の陰で見落とされがちだったワカメやカキ、ホヤ、ホタテなどの養殖を見直し、さらに海の生産力を引き出す資源管理型の漁業に活力を見いだすことでした。

宮城県栽培漁業センターでは、鮫ノ浦湾奥の谷川浜を本拠地として、アワビ、ホッキガイなどの稚貝と、ヒラメ、クロソイ、ニシンなどの稚魚を育成しており、地元と研究機関が手を携えて、資源管理型の漁業への挑戦が始められました。牡鹿町では、新たに策定された「牡鹿町第三次総合計画」に基づき、資源管理型漁業や、先端技術などを活用した漁業振興に積極的に取り組むとともに、「釣る・見る・食べる」などの体験ができる観光レクリエーションとタイアップした観光漁業の振興にも取り組んでいます。



カキ養殖の風景